

東洋大が昨年から始めた「能登ゼミ」で能登に魅了された学生がインターンを決めたり、東京で能登の情報誌を発行するなどの成果が出始めた。昨年の同ゼミ参加者は卒業論文でも能登を題材にしたいと18日まで6人が能登入りした。ゼミを誘致した「能登定住・交流機構」では学生たちとの交流が地域活性化の契機になると手応えを感じている。

いずれも同大国際地域学部4年生で、インターンを決めたのは深澤花里さん(21)と千葉果四直道市(21)。昨年のゼミでは志賀町で農家の暮らしを体験した。農家同士で助け合う「結い」を知り、東京に帰ってからも家族のように接してくれる人たちの出会いが能登での就職を決意させた。

人と接するのが好きで、七尾市和倉温泉の旅館「多田屋」の内定を得た。営業職を希望し、「外から来た人間だからこそ分かる魅力を発信していきたい」と意気込む。

#### 東京で情報誌発行

昨年、珠洲市の地場産菜やインターン者の活動について調

## 東洋大「能登ゼミ」が縁

# 女子大生 七尾にインターン

能登の魅力を探り合う左から深澤さん、千田さん、志保石さん  
 能登町宣言



### 志賀で「家族のよう」 農家体験

べた千田千穂さん(21)と千葉果四直道市(21)は珠洲の

東京世田谷区には珠洲の情報発信するフリーペーパー「スノコト」を発行した。

観光案内ではなく「身近な暮らしの中の小さな物語」をテーマに農圃職人や蛸島漁港

でのイワシ漁の様子などを紹介、東洋大キャンパスなど都

内て配布した。11月ごろには第2号を制作、ホームページでも情報発信する予定だ。

同大の藤井敏信国際地域学部長は「能登ゼミでは地元の人

が学生に本音をぶつけ、いい影響を与えている。地域おこしの新たな流れができた

ろ」と話した。

### 宝達葛の活用探る

東洋大の能登ゼミは、2日目の18日、各地でワークショップが行われた。今回初めて学びの場となった宝達志水町では、学生3人が同町特産の宝達葛について住民から話を聞き、地域振興への活用策を考えた。

3人は同町宝達で、宝達葛の商品開発に取り組む女性団体・くず菜会の石田外美子代表(76)らから活動内容を聞いた。石田さんは高



か「あめを作ってみては、など積極的に質問、提案した。

能登町五十里では、国際地域学部3年生3人が地区に伝わる五十里歌舞伎や祭りなどについて住民から聞き取り、地域振興策を考えた。

ワークショップは輪島、珠洲、穴水、志賀の各市町でも行われた。

くず湯を味わいながら話を聞く学生  
 宝達志水町宝達